

『奄美大島と大西郷』における奄美と日本 ——昇曙夢の視点——

松尾 須美礼*

1. はじめに

『奄美大島と大西郷』は、奄美出身の昇曙夢によって書かれ、昭和2年(1927)に春陽堂より出版されたものである。この著作では、西郷隆盛が安政6年(1859)、奄美大島に謫居になった状況を追いつつ、その時の西郷を観察者として設定することによって、彼の目を通した、当時の奄美の置かれた状況や民俗風土を描くことに主眼が置かれている。そこには昭和2年という時代に、西郷を登場させることで語り得た、昇の奄美に対する思いが込められているはずである。

昇曙夢という人物を理解する上で、鍵となる面は三つあると指摘されてきた。(昇隆一「父・曙夢について」)一つは奄美出身であるということ。明治11年(1878)に実久村芝に生まれ、『奄美大島と大西郷』の他にも、昭和24年(1949)に『大奄美史』という大著を完成させている。アメリカ占領期には、復帰運動の中心にもなった。二つ目はロシア文学者としての側面である。明治の末より同時代のロシア人作家の作品を多く翻訳してきた。そして三つ目は東方正教の信徒(=ハリストアニン)としての面である。17歳で洗礼を受けて以来、教会と関わるなかで生きてきた人物である。

ロシア語教授という形で、軍部に関わっていった昇は、国家のなかで居場所を見出そうとしたハリストアニンの典型と言える。しかし昇の場合、そこに“奄美”という要素を無視することは出来ない。ハリストアニンであるということが、彼の行動にいかん作用したのかを考えるのと同時に、奄美を“背負う”ということが、その時代状況のなかでどういう重みがあったのかを考える必要がある。内国マイノリティーともいえる奄美出身者は、政治権力を中心としたときに、周辺に追いやられたという点において、ハリストス正教会の初期の信者の大部分を占めた、東北敗残藩士と共通しており、その思いを捉えることは、正教会の特質を考えるためにも不可欠な課題である。

以上のことを考える上で『奄美大島と大西郷』がなぜ書かれたのか、そしてどういう時代状況で書かれたのかを見ていくことが必要となる。さらにこの中において、西郷がいかん語られ、どう評価されているのか、そして奄美の何が抽出され、それにどのような意味づけがなされているのかを見ていくことによって、民族としての奄美と日本、そしてそこに属する自分をどう認識し、国家とのかかわりをどう規定していったのかを探ることができるのではないかと考える。そして内国マイノリティーとしての自己と、国家を意識する思いが錯綜する、その根幹を考察することを今回の目的とする。

*筑波大学大学院歴史・人類学研究科

2. 昇曙夢という人物

『奄美大島と大西郷』を読み解くことは、最終的には著者である昇曙夢が如何なる人物であるのかを知ることになるであろう。しかしその前に、概略的にでも著者についてまとめることが必要である。昇を理解する三つの鍵、奄美とロシア文学と東方正教、は、昇の人生のどこに接点があったのか、そしてこの作品を著した昭和2年という年は、昇にとって、どういう意味があるものなのかを知らなくてはならない。

昇は明治11年(1878)、大島郡実久村芝(現・瀬戸内町)に生まれた。直隆と名付けられる。兄の知り合いであった熱心なハリストアニンから、来島の度に正教の話の聞き、興味を抱いたことから、学校を終えた明治28年(1895)、鹿児島に出て、数カ月後そのハリストス正教会で洗礼を受けた。翌年上京し、次の年正教神学校に入学する。当時正教神学校では、教理のほか一般科目として漢文、日本史なども教え、ロシア語は必修であった。ここの6年間で昇はロシア語をマスターし、在学中からロシア文学の翻訳を試みたりしている。卒業後、母校の講師に就任する一方、長年に渡り、日本新聞社、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社などの囑託となって、ロシア事情を担当したり、早稲田大学や陸軍士官学校でロシア語の教鞭を取ったりしてきた。またその傍ら、明治41年頃からは、ロシア近代作家の作品を翻訳、諸雑誌に発表し、それに関わる本も多く出版している。昭和になってからは、満蒙学校講師や陸軍省囑託となって、戦争色の濃い分野で翻訳や教授に携わった。戦後は、奄美大島母国復帰対策全国委員長として活躍し、その最中に『大奄美史』を出版している。奄美返還を見届けた後、昭和33年(1958)に80歳で亡くなった。

『奄美大島と大西郷』が出版された昭和2年の前後においては、大正13年に、鹿児島に講演で招かれた際、郷里に立ち寄っている。昭和2年には、本書も含めて5冊が上梓された。そして翌年3年には、トルストイ生誕百年祭でモスクワに招待されている。本書は正に、ロシア文学という分野において揺るぎない地位を確立し、東京での生活にある程度の成功を修めた、一人の在京奄美出身者によって書かれたものである。

3. 昭和2年という時代

次にこの著作が書かれた昭和2年が、どういう時代状況にあったのかを見ていきたい。『奄美大島と大西郷』を、故郷奄美に対する昇のある種のメッセージとするなら、そのメッセージはいかなる状況の奄美に向かって発信されたものなのであろうか。奄美にとってこの年がどういう年であるのかを考えることは、昇の主張をより明確にする作業となる。また、彼が関わる正教会の状況も合わせて考える必要がある。

昭和2年は、山東出兵がなされ、日本の軍事的大陸進出が本格的に始まった年である。当時日本ハリストス正教会は、既に黄金期は過ぎ去り、数々の災難を被った挙げ句、苦境の衰退期にあった。そもそも日本の正教会は、大主教であったニコライが、来日以来ほとんど独力で支え、運営してきたものであったことから、そのニコライが明治45年(1912)に亡くなった後は、その推進力と精神的支柱を失ってしまっていた。また本国ロシアにおいて、大正6年(1917)にポリシェ

ヴィキ政権が樹立され、宗教が否定されたことにより、ロシアからの送金がストップし、経済的にも行き詰まっていた。正教神学校もこの年廃校になっている。さらに追い打ちをかけるように、大正12年(1923)の関東大震災によって、全国のハリストアニンの信仰の拠り所であり、東京の名所にもなっていた東京復活大聖堂が倒壊する。活力を失い、自らの信仰の基盤が揺らぐなかで、復活の兆候も見出せないまま沈滞期にあったのが、昭和2年前後のハリストス正教会の姿であった。この当時の正教会に、昇がどれほど関わっていたかは明白ではないが、6年後の昭和8年(1933)には、教会機関誌『正教時報』の主筆に就任した。として、昇の名前を見ることが出来る。

では次に、奄美はどのような状況にあったのだろうか。昭和2年の奄美にとって、最初に特筆すべきことは、前年即位したばかりの昭和天皇が行幸したことである。この数年、奄美は全島民を巻き込むカトリックの迫害が起こっていた。その「非国民」報道以外では知られたことのない南海の島にとっては、もちろん初めての行幸であり、島外にその存在を知らせる、画期的な出来事であった。鹿児島新聞は「光栄に輝く奄美大島の思出」と題した昇の連載まで企画している。この天皇行幸が奄美に何をもたらしたのかを、宮下正昭氏は『聖堂の日の丸』の中で次のように述べている。

天皇の奄美来島は奄美にとって「空前のできごと」(『名瀬市誌』)であった。かつて奄美にこれほどの中央の軍、政府関係者が集まったことはなく、これほど奄美が新聞で取り上げられたことはなかった。奄美が自らを見つめ直す絶好の機会だった。しかし、その結果は、無批判な“本土化”を進めた。当時、貧困のなかにあった奄美は、経済的な本土並みを目指したが、極言すれば、得られた「本土並み」は年々強まっていた軍国主義化の風潮だけだったと言えるかもしれない。そしてその軍国主義の風潮は、やがて本土並みを越えてしまう。(p.89-p.90)

また、当時の奄美の貧困状況については、次のように述べられている。

第一次大戦後の大正末期、日本全体に不況が慢性化するなか、奄美はさらに悲惨な状況に置かれ、ソテツからとったでんぶんで飢えをしのいだが、なかにはソテツの中に含まれた毒素で中毒死する島民も出て「ソテツ地獄」と言われた。当時の大島郡の経済状況を、鹿児島新聞(昭和2年8月8日付)は次のような計算で紹介している。主要産業の大島紬の生産額は一戸当たり年間五百十二円で、出稼ぎによる送金一戸平均二十三円を足して合計が五百三十五円となる。これは鹿児島県の平均より約二百円、全国平均と比べたら四百円も少ないという。だから「生活、文化の程度も低い」と評している。

“本土並み”になれない奄美に対し、離島して本土で成功を修めた奄美出身者たちは、貧困の原因が、島民の怠惰にあるとして、機会あるごとにその不甲斐なさを嘆き、あらゆることで“本土”を模範とするよう説いた。では昇の『奄美大島と大西郷』もまた、その流れの一つに位置するものなのであろうか。

ここでもう一つ、当時の奄美の動きとして無視できないのは、カトリック迫害である。奄美大島は明治24年以降の宣教により、カトリック信者が大変多いところである。現在でも人口八万人足らずの島に、教会が島の北部を中心に31カ所ある。信者の数は四千人余りで、人口の5%以上

を占め、この比率は昔から殆ど変わらない。日本全体では、カトリックの比率は0.5%にも満たないから、その密度はかなり高いと言える。戦前「奄美は国防上重要な地帯」とする軍部の煽動によって、奄美のカトリック迫害は本土より一足早く、それもカトリック系ミッションスクールの大島高女を廃校に追い込み、殆どの信者が強制改宗させられるほどの、激しい排撃運動となって噴出した。“国家”というものに対し、本土の人々よりさらなる忠誠を示すことを求められ、奄美的なものを捨て去り、本土並みの生活を手に入れることを脅迫されてもがく故郷奄美に対して、昇は何を訴えかけようとしたのか。

4. 「序」に見られる昇の執筆動機

この本の序において昇は、奄美について論じることの意義を次のように語っている。

島民のお伽噺のやうな神ながらの原始的生活と、それ等の島々に残る日本古代文化の痕跡とは、それ自身としても研究家の興味を唆るに十分であるが、更に我が大和民族が三千年來通つて來た過去の姿をさながらに髣髴せしむる点に於いて一層興味が深い。我が大和民族が今日の文化程度に達するまでには、果して如何なる過程を辿つて來たか、その胚胎期と原始的形態とは今日南の島々に伝はる言語、風俗、習慣等に就いて見るのが、一番の捷徑であらうと信ずる。(p.1)

昇はここで自らを“我が大和民族”と称し、その大和民族の原始的形態を知るには、奄美について調べることが一番の近道であるとしている。しかしさらに、

是等の貴重な南島文化の名残は、一面環境の影響を受けて、南国特有の情熱的なロマンスと結び、或は海洋島独特の神秘的想像に彩られて、他に見られない一種特異な文化系を構成し、一面琉球、支那朝鮮、台湾、南洋諸島、南蛮との交通によつてエキゾチックな匂ひを高めたにも拘らず、その内容は何処までも奄美民族が幾度かの受難期を通じて周囲から虐げられた不断の孤島苦を深刻に物語つてゐる。(p.2)

とし、“奄美民族”を別個の集団としても捉えている。そしてその民族が“幾度かの受難期”を経たことを明確にし、それがその文化に深い傷として刻印されていることを指摘している。そして本書の執筆動機を次のように明記する。

本書はそれ等(西郷伝…引用者注)の欠陥を補ひ、誤謬を修正して、その真相を明かにし、前後五年間に互る謫居生活の史的道德的意義を開明すると同時に、一面に於いては前述の通り我が南島文化の片影を広く学会に紹介して、今後更に専門的研究の端緒を開かんとするの目的に出たのであるが、その動機は一に我が郡二十三万同胞の民族的自覚に資せんとする微意に外ならない。時恰も我が南島は、聖上陛下の行幸を仰ぎ、南洲翁の五十年祭を迎へて、これを一転機として我が郡民生活の上に一大覚醒を見んとする機運に際会してゐる。幸ひにして本書が聊かなりと、古きを温ねて新しきに生きるの道を見出さんとする郡民の奮發努力に向つて、何等かの暗示と光明とを齎らすことが出来れば、著者の大に満足するところである。(p.5)

ここに見出せる昇の姿勢は、奄美文化が大和民族の源流であるとするので、その掘り起こすべ

き大義名分を掲げ、没後五十年目を迎える年に西郷隆盛を取り上げることによって、明治の元勳の威光に寄り掛かりながら、「次々に移り変わる周囲からの厭迫と脅威」に晒され、故郷への誇りも持ち得ず、「郷土研究熱の乏し」い状況にある「我が郡二十三万同胞の民族」に対し、一民族としての自覚と誇りを提示するものであったと言えよう。

5. 「大西郷」の位置づけ

本書において、西郷は二つの面を代表する役割を、昇によって担わされている。一つは奄美を厭迫し、搾取し続けてきた薩摩の象徴として、もう一つは奄美の文化の独自性を認め、理解する本土人の代表としての役割である。始めの役割の中においては、西郷にとって奄美は次のようなものとして捉えられる。

大島といへば打首、切腹に次ぐ重罪人の遠島地であること以外に、何等の知識もなく、たゞ遠島人達の僻んだ心で見て来た噂を透してその有様を想像するより外なかつた。而も噂の中心は春から秋にかけては野山はもとより、村里にまでハブ（毒蛇）がのさばり出て人畜に非常な危害を与へるとか、島民は全くの夷狄風で、性質もハブのやうに陰悪を極め、内地人さへ見れば取つて喰ふやうな態度で接するとかいふのであるから、殆ど安んじて身を置き得る場所とは思はれなかつた。(p.7)

また、薩摩の人間が奄美の人々に投げかけてきた言葉が、西郷の口を通して語られる。

充たされぬ心の寂しさに堪へ兼ねては初めて島に着いて感じた快い印象も消され勝であつた。時には抑へる由もないほどに腹立たしく思ふことすらあつた。

《成程島人はハブ根性だわい。》(p.20)

しかし長い謫居の中、島民と触れ合い、島について知るようになるに連れて、西郷の言葉は次のように変化してくる。

現在見る島人の、人を恐れ憚るあの態度や消極的な小賢しいあの眼の光りには、いさゝかもこの誇るべく伝統と歴史との影がなく、たゞ虐げられた人々にのみ見出す特徴がはつきり現はされてゐる。

《彼等は必ず虐げられ、厭迫され通した民族に相違ない。》

こゝに考へいたると、初めて西郷は幾分謎が解けたやうな気がした。同時に最も大島人を迫害し厭迫しつゝあるのが藩庁と、これを繞る藩吏と、鹿児島人とであることを知り、現に城下の人すべてが大島人に対して「島ゴロ」だの、「島豚」だのと極端な軽侮を加へつゝあるのを我事のやうに腹立たしく思つた。(p.26)

虐げられてきた歴史が、島民をいじけさせ、消極的にしてきたとし、その原因である薩摩藩の象徴としての西郷がそれを反省する、という筋道が作り上げられているのだ。同じ内容は言葉を変えて、さらに繰り返される。

《人間の顔形は境遇によつて変化する、だから飽くことを知らぬ厭迫は自づと島民の心をゆがめて他人を警戒する性質を植え付け、すべての人間を小慥巧にし、遂にそれが所謂「島人根性」

となつて伝統されたのである。而も彼等は共通の苦しみを負はされながら訴へる由もなくして長い年月を経過する間に、互に慰め合ふその心持がしだいに顔や態度をも支配して、いつしか同じ型に融け合つたのであらう。して見れば同じ民族でありながら大島人のみに見る顔の特徴や、特別の感じはみな外部から加へた厭迫の結果であり内に萌しても現はすことの出来ない不平不満の結晶なのである。》(p.38-p.39)

ここで昇は、西郷を反省させることによって、長い年月に渡る薩摩藩の厭迫を糾弾し、奄美の人々の外見的特徴が、民族を異にしていることよりもむしろ、その虐げられてきた歴史に原因があるとした。そしてその圧政の歴史のなかで失った民族の誇りを取り戻すことを訴える一方で、大和民族の中における居場所も模索した。それは、時代が“奄美民族”として精神的な独立をすることに価値を置かせず、大和民族として一致団結することを奄美の人々に強制的に望ませていたからである。しかし常に本土人より一段下に扱われてきた奄美の人々は、まず大和に属する人間＝本土人と同じ人間であるという確信を持たないことには、奄美に生きる人間としての尊厳も取り戻し得なかつたのである。それは、その尊厳を踏みにじられてきた、厭迫の時代を見つめなおす作業を必要とした。西郷が持ち出されたのは、この複雑な思いを奄美内外に訴えるための、昇の作戦だったと言えよう。

6. “民族”文化としての民謡と八月踊

昇は「大島文化の道程」という章において、「民謡こそ島民の生活史である」という副題をつけて民謡を取り上げている。これは、この時代においては特筆すべき記述であると言わねばならない。それは当時、島外在住の出身者や島の支配層においては、民謡は“奄美的なもの”として排除すべきものと考えられていたからである。それらの言説は『聖堂の日の丸』の中に取り上げられているので重引する。

・泉二(司法省刑事局長…引用者注)同様、単独拝謁を受けた亀岡豊二(喜界出身、東京在住の実業家)も、鹿児島県大島支庁がつくった『奄美大島行幸記念誌』(昭和4年刊行)のなかで同様に奄美の人々に訴えている。

亀岡は(中略)「日進月歩の社会の進運に伴うために、風俗習慣等も極力改善しなければならぬ。第一、言語は寸時も早く普通語に改めたいのである。民謡の如きもあまりに退廃的亡國的な声調に流れるようなものはやめて貰いたいのである。ことに酒色に耽溺することを人生唯一の娯楽とする考えを根本から改めて自分の職業を天職と楽しむ美風を養成することが急務である」とした。(p.90)

・島唄は哀調を帯びた歌詞、調べが多いためだろう、下村(奄美要塞司令官)は「消極的な民族となった大島人の生活状態の一面を端なくも現している」と記す。さらに、島唄の持つ感受性豊かな表現に一定の評価を与えながらも、「この土地の民謡は殊に詠嘆的悲観的なものが多い」と批判。(p.134)

島唄は、軍國的意気を鼓吹するものではなく、島民を墮落させる元凶として非難されていた。そ

のような鳥唄を愛好している限り、奄美はいつまでも“本土並み”にはなれないという論調である。その中で昇は民謡について次のように記す。

・南島一帯の言語は動詞やアクセントが独特の転化を来した外殆ど上古の大和言葉を基準としてゐる。中にも民謡はその形式に於て琉歌と同じく八、八、八、六調三十字から成り立つてゐるが、歌詞は純然たる日本文学である。(p.110)

・殊に歌謡の系統に於て同じ流れを汲んで居りながら、調子に於ては琉歌の概して賑やかで華やかで人の心を浮き立たせるに反し、大島民謡が聞く者の涙を誘はねばやまぬほどの哀調を帯びてゐるのは、藩庁の厭迫に抗し兼ねた心持ちの表現と見るべきであるが、一面平家の落人達が一の谷や、屋島や、壇の浦で討たれ滅んだ一門を悼みつつ都恋しと歌つたであらう歌の調子を伝へたものとも思はれる。かうしたことを考へ合はしても島民が平家の落人から文化的影響を受けたことが是認されるのである。(p.112-p.113)

・伝説や口碑は時代と共に多少の変改を免かれぬけど、何等の誇張もなく修飾もなく、たゞありのまゝなる感情を吐露した民謡には、奄美民族の生活や、思想や文化の変遷がはつきりと示されてゐる。(p.114)

ここで昇は、平家落人伝説を持ち出し、日本文学の流れの中に鳥唄を位置づけることで、それを愛好することを肯定する。それは日本文学を隠れ蓑にすることにより、昇が奄美の精神の中核と見なす鳥唄を、奄美の人々が誇らかに歌える状況を守ろうとしているとは言えないだろうか。鳥唄は昇にとって、奄美の人々の矜持を保つものであると同時に、奄美と自分との結びつきを確認するためのものでもあった。それは昇の長男の回想録「父・曙夢について」にも記されている。

何よりも父の強烈な郷土愛を感じさせたのは、大島民謡に聴き入っている時の父である。父は島の民謡（鳥唄とよばれている）が大好きで、昭和初年に出された奄美民謡のレコード三十六枚を全部買いこんできて、ひまな時にはいつも、それをかけてはじーっときいているのであった。それは父の生活の中でもっとも楽しいひと時だったのだろう。父は特に気に入った唄をかけている時には、涙を流さんばかりにしてきいていた。中でも父が一番好きだったのは「カンツメ節」と『テダのうてなごり』という唄である。他の唄も多かれ少なかれそうであるが、特にこの二つは、なんともいえない深い哀調に満ちあふれ、かつての島の人たちの胸底に秘められた怒りと悲しみが切々と聴く者の胸にせまってくるのだ。(『窓』No.38,p.4-p.5)

しかし、同じ“大島文化”である八月踊については、「八月踊とアザン崎の争ひ」において、別の見解を示す。

大島の八月踊は内地の盆踊のやうなもので、律動的円舞の原始的民族舞踊である。歓びに躍動する心の自然の表現である。律動を主とした単純な民謡風の歌調は、日本在来の和楽構成の音韻とは全然関係はない。半音の抜けたスケール五度の長音階から成り立つてゐる。拍子や舞踊の型はスペイン系の舞踊に属し、ギリシャ系の肉体の波調を添へた、南国には誠に珍しい民族舞踊である。(p.146-p.147)

ここでは、日本の盆踊りに似ているとは言ふものの、鳥唄のように日本の文化の中に、あえて位

置づけようとする意図は見られない。そしてこの昇の主張は、『大奄美史』の解題によれば、島民には次のように受け止められた。

筆者（大山麟五郎…引用者注）は、曙夢の著書の名も正確には知らない奄美の老人で、曙夢が郷里を講演してまわったころ青年団長をしていたという故老に曙夢観をきいてみたことがある。老人のぼつりぼつり語る「曙夢先生」は、奄美の精神的解放者としてのそれであった。「先生のおかげで八月蹄もいばって踊れるようになった」ことを、かつての青年団長は語ってくれたのであった。（解題 p.4-p.5）

7. おわりに

最後に昇は、果してこの著作によって何を訴えようとしたのか、そして民族と国家についてどう規定したのかを考えていきたい。

長年支配と搾取のもとにあった奄美の人々にとっては、その現状を打破したり、広く世界を知ろうとしたり、近代的立身出世を望んだりするには、それまでとは違う、新しい価値観に触れる契機を必要とした。そしてそれは結果的には“奄美的なもの”からの脱出を意味した。昇にとって、その新しい価値観とは、正教会の教えと、それに付随する形でのロシア文学の世界であり、奄美の中においてはカトリックの信仰であったと言える。

“辺境”に位置づけられた奄美においては、自らを相対化する目は、長い間奪われていたと言える。それは、“辺境”というものが、支配する側が作り出したシステムであり、その“辺境”として存在する以上、心理的な自立を目指すような契機は、もともとありえないからである。そのため、新しい価値観を与えられたときの反応は、“自立”という意味としてではなく、奄美で言うなら、本土への“劣等感”として現れる。その劣等感とは、本土への憧れを促し、“本土並み”さらにはより強く“本土的”になることが指向されるのである。その時“本土的なもの”は本土にある時よりも強調され、妄信的な追従を生み出し、本土と異質なものは“悪”として排除される。それが奄美における軍国主義の強調であり、習慣の否定となったのである。

奄美の貧困問題を解決するために、“本土並み”になることを主張したのは、島の知識人であり、成功した島外在住出身者であった。彼らは我が故郷の後進性を否定なく自覚し、天皇の勤勉な赤子になることこそが、唯一奄美の生きる道であると考えたからこそ、奄美的なものの排除を訴えたのである。奄美を思う気持ちとしては、昇も同じ流れのなかにいたといえる。しかし『奄美大島と大西郷』においての昇がそれらと決定的に違うことは、昇は日本の伝統文化のなかに、奄美の独自性を結び付けるという作業をすることによって、奄美の独自性が否定されることを免れようとした点にある。それは一見“本土的なもの”の礼賛と映るが、昇の真意はそこではなく、恐らく奄美の生活に溶け込んだ文化を価値あるものとして記述することによって、圧政のなかで失った人間的な誇りと輝きを、奄美の人々に取り戻したい、という願いであったのだろうと思う。奄美の独自性は、昭和2年という時代性、また君主との関係を重んじる正教会の影響を受けたであろう昇の国家概念からしても、大和民族のなかに位置づけることで、辛くも保たれた

のではないかと考える。

【参考文献】

昇曙夢『奄美大島と大西郷』（1927 春陽堂）

昇曙夢『大奄美史』（ユーラシア叢書 8 1975 原書房）

宮下正昭『聖堂の日の丸—奄美カトリック迫害と天皇教』（1999 南方新社）

新刊紹介

渡邊欣雄著

『風水の社会人類学—中国とその周辺比較—』

1990年代の風水ブームにより、風水という言葉は人口に膾炙していき、風水に関するさまざまな書籍が出版された。村田あがはこれらの書籍を、①風水を題材とした読み物・小説、②風水（家相）に関する実用書、③学問的研究書の3種類に分類し、①②がもっとも多く出版されているが、学問的研究の遅れと風水が正しく理解されていないことを指摘している〔「テーマ書評・風水」『日経アーキテクチュア』1995年10月30日号220-221頁〕。

こうしたなかで著者の渡邊欣雄は沖縄、台湾、中国と広範な地域を対象に、もっとも精力的に風水研究を進めている。前著『風水思想と東アジア』『民俗知識論の課題—沖縄の知識人類学—』では、風水の世界観、風水説と親族論、知識人類学的研究を展開し、風水の紹介と理解を啓蒙し

てきた。さらに『風水—気の景観地理学—』では沖縄、中国でのフィールドワークの成果によりその実態を解明した。本書は著者の90年代における風水研究の総括であり、氏の学位論文が骨子となっている。本書は「はじめに」「風水研究の歴史」「東洋的環境認識としての風水」「東アジアの風水意識」「大陸中国と風水民俗」「中国の墓地風水」「風水民俗の多様性」「中国風水と沖縄風水」「おわりに」の九章から構成され、東アジアの風水を多角的に研究したものである。本書は人類学的風水研究の最大の成果であり、風水研究に留まらず東アジアの民俗研究を進める者にとって必読の書である。（宮内貴久）

2001年12月20日発行 467頁

8,000円（税別） 風響社